

輸出向けリングゴは、台湾で輸入枠が設定されてきたころは、陸奥、世界一、金星、王林、ふじで、台湾のWTO（世界貿易機関）加盟によって輸入枠が外れると、一般消費向けが増大した。品種としては、これらの品種が最も高級品として珍重さ

れた。玉サイズも32玉以上の大玉に人気がある。リンゴ業界では、10箱に何玉入っているかで大きさを表すのが一般的で、例えばふじの場合、最も生産量の多いのが36玉と40玉で全体の約6割を占め、これより大玉は32玉、

5万トン時代へ 青森リングゴ輸出

15

る世界各地のリングゴは、ほとんどサンふじなので、台湾市場でふじ同士の産地間競争が展開されることになった。もちろん世界一などの高級品種も一定量輸出されているが、他の国で生産されている品種なので競争の心配はない。

台湾での産地間競争



色や甘さで本県産優位

では、いかにして同じ保っていったのか。台湾ふじで本県産の優位性をの貿易業者によると、本

県産が評価されているポイントは①きれいな赤い色②甘さ③固さーという。有袋ふじを頂点として培ってきた着色や高品質技術、葉取りや玉回しなど、リングゴを1個ずつ丁寧に手をかけて育ててきた管理技術が高く評価されているのである。特に玉回しには本当にびっくりしているようだ。

本県のリングゴ農家も高

県の事業で台湾に派遣され、新北市三重市場でリングゴの調査をする本県の若手生産者たち

2015年12月（県りんご協会提供）

齢化と担い手不足に陥っている。この影響を端的に表しているのが有袋栽培比率だと思つ。ふじで従来5割あったものが、2014年に3割を切っている。リングゴに袋をかける手間暇も技術も徐々に失われているのだつう。

このままでは、輸出先での産地間競争に負けてしまつのではないかという危機感がある。ここ数年、若手リングゴ生産者が輸出先の流通実態を見る機会が増えている。他国産リングゴとの比較で、改めてどのようなリングゴが本県に求められているのかを感じてもらっている。若手生産者の今後の奮闘に期待したい。

（県りんご輸出協会事務局長 深澤守）